

平成24年度国立天文台研究集会開催報告書

平成 25年 5月 28日

国立天文台長 殿

代表者	氏 名	(ふりがな) いわむろ ふみひで		
		岩室 史英 		
	所属・職	京都大学大学院理学研究科 准教授		
	電話	075-753-3891	E-mail	iwamuro@kusastro.kyoto-u.ac.jp
研究集会名	「2020年に向けてのロードマップ」			
開催期間	2012年 8月 9日 ～ 2012年 8月10日			
開催場所	国立天文台三鷹			
参加人数	146名、うち大学院生17名			
研究集会の概要	光学赤外線天文学連絡会は研究集会(光赤天連シンポジウム)を年1回程度開催し、国立天文台の共同利用を始め、望遠鏡の整備や運用についての情報・意見交換、コミュニティの意思決定に向けた議論を行っている。 2012年度には「2020年に向けてのロードマップ」というタイトルで開催し、2020年代の稼働を目指して推進されている光赤外線分野の中型・大型計画について、光赤外線コミュニティとしてどのようにそれらを実現し、サイエンスを展開していくかのロードマップについて議論を行った。5つのセッションに分けて、セッション1: 2020年代のサイエンスの概観からスタートし、セッション2: 現在の基幹装置であるすばる望遠鏡の将来計画の議論、セッション3: 次世代の地上の基幹装置であるTMTと中型望遠鏡計画の議論、セッション4: 衛星の基幹装置であるSPICAと中型衛星計画についての議論、そしてセッション5: 大学からの大型計画への参画についての議論が行われた。 学術会議分科会からの依頼から光赤外分野での中規模計画の取りまとめについて議論が始まったこともあり、光赤外分野の将来の大型・中型計画の進め方について活発な議論が行われた。			

研究集会の成果	2日間のセッションに対して146名(うち大学院生17名)の参加があり、光赤外分野の幅広い研究者が集まって議論を進めることが出来た。 セッション1ではサイエンスから見たときにそれぞれの計画がどのような役割を果たしていくかについて宇宙論、銀河形成、恒星、系外惑星の研究という観点から招待講演を行ってもらいサイエンスの展望から見たそれぞれの計画の位置づけを議論することが出来た。 セッション2では現在の光赤外の基幹装置であるすばる望遠鏡が今どのような枠組み(特に国際連携や大型探査観測の推進)で運営を進めるのか、HSC/PFSや次世代補償光学系など今後稼働する観測装置について議論を行うことが出来た。 セッション3では2020年代の地上基幹装置となるTMTの推進状況、中型の地上望遠鏡の計画現状について発表してもらい、TMT実現に向けたロードマップについて議論を行うことが出来た。 セッション4では2020年代の衛星基幹装置となるSPICAの推進状況、中型の衛星計画について発表してもらい、SPICA計画の実現に向けたロードマップの議論を行うことが出来た。 セッション5では特に大学のグループの大型計画への参画を中心として中型計画と大型計画の連携について議論を行うことが出来た。 以上の議論を通じて、大型計画だけではなく、中型計画についても光赤外の広いコミュニティの中でその意義や進捗状況についての認識を共有することが出来たのは大きな成果であった。中型計画についてはこのワークショップでの発表や議論が審査委員による中規模計画への評価へのキックオフとなった。
その他参考となる事項 (希望事項も含む)	